



タイ・バンコクの当事務所の女性スタッフの兄ジョーさん(28)が、韓国へ出稼ぎに行くというところで、見送りのためにスワンナプーム国際空港へ出向いた。ジョーさんは、ラオスとの国境に近い東北部イサン地方にあるノンブアランプー県生まれ。地元で大学を卒業後、家業のクイティオ屋(タイ風のラーメン店)で両親をサポートしながら働いていた。お店はにぎわっており、家業を手伝い田舎で暮らすことに不自由はないが、外国でお金を稼ぐ夢を持ち、外国人労働者への待遇が良いとされる韓国に行くことを2019年に決めた。20年4月に出発予定だったが、新型コロナウイルス

韓国への就労者が増加

タイ人の出稼ぎ労働事情

感染拡大により3度出発を延期し、ようやく出国の日を迎えた。語学学校に3カ月間通って韓国語を勉強し、「準備は万全」と笑顔で話した。20年度のタイ政府の統計によると、タイ人の就労者数の上位国は台湾、日本、スウェーデン、マレーシア、韓国と続く。韓国の場合、12年に就業許可期間(4年10カ月)が終了し、韓国から出国した外国人労働者が、出国後3カ月経過後に再入国して就業できる制度が新設された。「韓国は研修生として日本で働くより魅力がある」と考えるタイ人も多く、韓国への外国人就労者3130人の約8割が再入国(20年)している。今後も長期で韓国へ出稼ぎに行くタイ人が

増えていくと思われる。空港のロビーでは、同じくイサン地方から出稼ぎに行くタイ人53



出国を待つタイ人の出稼ぎ労働者
タイ・スワンナプーム国際空港

人が待機していた。8割が男性で、農業従事か工場勤務となる。ジョーさんは、ソウルに近い町のプラスチック工場で旋盤工として働くことが決まっている。給与は5万バーツほど(約17万円)で、残業代も期待できるといふ。ジョーさんは明るく振る舞っていたが、3年間家族と離れ、初めて異国の地で働く人たちの顔は緊張でこわばっていた。出稼ぎ労働者のスーツケースの重量は1人23キログラムまで。わずかな衣料を持っていくのが精いっぱいだろう。タイでは地方都市の就労機会が少ない。また、タイ東北部は塩分が高く土壌肥沃度の低い高原台地が多くを占める。農作物が育ちにくく、干ばつや洪水の頻度も高い。東北部の地域経済の衰退が、出稼ぎ労働を余儀なくしている。(岐阜信用金庫バンコク駐在員事務所長 高橋英孝)